

チェルノブイリ通信

チェルノブイリ支援運動・九州

事務局：北九州市小倉南区徳吉東1丁目13-24

☎/FAX 093-452-0665 深江 守

No. 4
1991年2月11日 新

中東湾岸危機は、戦争の回避と平和的解決を求める全世界の人々の願いを裏切り、1月17日ついに米軍を主体とする多国籍軍のイラク空爆が始まり、全面戦争に突入しました。油田地帯を舞台に、近代兵器を駆使した全面戦争が起きれば地球環境に取り返しのつかない被害をもたらすだろうことは、戦前誰しもが指摘したことでした。そうした危惧が開戦直後、米軍による原子炉攻撃という形で現実のものとなってしまったのです。これで一度紛争に巻き込まれれば、原発は攻撃の対象になってしまうことが明らかとなりました。「チェルノブイリ事故時の100分の1程度の放射能が漏れた可能性がある。」という指摘は、戦時下で何ら放射能に対する対策も取られないという状況を考えるならば、再びチェルノブイリの悲劇が想起されます。原子炉を攻撃するという米軍の行為はいかなる理由があるうとも、決して許されるものではありません。また、イラクによる原油放出も厳しく非難されなければなりません。人間は一体どこまで愚かになれるのか。この戦争が明らかになってくれるでしょう。

などと客観的な立場でいられるわけではないのですが。

一方ソ連においては、ペレストロイカの終焉を思わせるバルト三国へのソ連軍の武力介入によって流血の惨事がおきています。ウクライナ共和国なども民族主義運動の根強い地域で、特別監視地域に指定されている状況だと聞いています。ソ連社会におけるこうした保守化への動きは支援運動にも少なからぬ影響を与えるのかも知れません。

新年早々、暗いニュースばかり続いています。そうした情勢に呑み込まれることなく明るく、元気に今年も頑張りましょう。

さて今回の通信は、1月20日、福岡市で開かれた第二回運営委員会で話し合われた内容を中心に、今後の取り組みについての提案となっています。チェルノブイリ5周年に向けた企画が完全に固まっていますが、なにかいいアイデア等ありましたらご連絡ください。また、福岡でやっている「あきかん募金」の用紙を同封しています。あきかんにきれいな紙を貼り、その上からさらに同封の用

紙を貼りつけ、思わず募金をしたくなるような「かわいい貯金箱」を作ります。出来上がった募金をしてくれた人におみやげとして一個づつプレゼントし、募金箱にいっぱいお金がたまったら、また持ってきてもらおうという中々のアイデアです。ぜひ参考してみてください。

支援物資は無事ジトミールの 人々の手元に

1月24日、新潟空港を飛び立った飛行機は同日午後11時55分、無事モスクワ空港に到着しました。予定どおり進めば支援物資は、25日の午前中にはピースニック新聞社の方に引き渡され、その日の夜にはクリスマスプレゼントとしてジトミールの町につくはずでした。しかし、実際ジトミールの人々の手元に物資が届くまでには様々な困難が待ち構えていたのです。ちょうど私たちが物資を送った時分には、22カ国からの救援物資がモスクワ空港に到着していたそうです。必ずしもチェルノブイリへの救援物資という訳ではありませんが、それぞれが何万トンという単位のもので、それらがモスクワ空港に山積みされていたわけですから、私たちが送った2トン程度の物資がどういう状況に置かれていたかはおよそ察しもつきません。

ピースニックの人たちが空港に物資を受け取りに行ったら最初、「外国からの荷物は3日間留置になります。」と言われたそうですが、そうした事情もわかる気がします。とはいうものの3日後にま

たウクライナからトラックに乗って受け取りにくるというわけにもいきません。

「救援物資なので直ぐに受け取れるように大使館を通じて働きかけてほしい」という連絡がピースニックの方から入りました。すぐにソ連大使館に連絡をとり物資の受け渡しについてモスクワ空港の方にFAXを入れてもらいました。ここから大騒動が始まる訳です。

税関で物資の受け渡しを待っていたピースニックの人たちに今度は「救援物資はハバロフスクで間違っ降ろされたようです」という返事が返ってきました。さあ大変です。行方不明になった物資の大捜査が始まる訳です。

モスクワ空港まで取りに行きさえすれば問題はないと思っていた私は、この連絡を受けたとき目の前が真っ暗になりました。どうしてそんなことが起きるのかわかりませんが、ようやく29日になって「物資はモスクワ空港に到着している」ということが明らかになりました。また、ピースニック新聞社の方からも、「税関と話がついたので年が明けたら荷物を受け取りに行く」という連絡がありやっと一段落です。

1月8日、私たちが送った900キロに及ぶ支援物資はピースニック新聞社の手に残りました。ただ全ての物資が無事届いたという訳ではなく、やはりいくつか不明の物資があったことも事実です。現在の混乱したソ連の状況を考えるならば、全部紛失しなかつただけでも好運だったということでしょうか。放射能測定器が無事だったのには胸を撫で下ろしました。

1月24日、支援物資がどのように被

災者の手元に配布されたのか、連絡が入りました。

まず放射能測定器ですが、オーンスク市中央地区病院、オブルチ市、ナロヂチ市衛生検査所に1台ずつ、ジトミール市州保健省には2台渡されました。また粉ミルクや絵本類は、ナロヂチ市セレッツ村中学校、幼稚園、ナロヂチ市中央病院、コーラステン幼稚園、イスコロチ村幼稚園、ウショミール村幼稚園、ミルネイ住宅地区幼稚園、カリノフカ幼稚園、ジトミール市小児甲状腺放射線治療所などに送られています。

わずかな物資ではありましたが少しは被災者の人々の心の支えになったのではと思っています。今回の取り組みを通してモノだけを送ることがいかに大変であるかつくづく感じました。そうした理由からだけでもありませんが、今回は支援物資といっしょに「医療調査団」という形で「ひと」を現地に派遣したいと思っています。

6月、医療調査団を派遣します

今回の経験で物だけを送ることがいかに難しいかが分かりました。というよりもある程度は分かっていたのですが、これほどまでとは予想外でした。支援運動をはじめた当初からの問題であった、「顔の見える関係」で運動を進めることも今後の支援運動に取り組むにあたっての課題です。また、最も緊急性を要する医療援助の問題もあります。白血病の子供たちを日本に呼び、治療を受けさせることが望ましいのですが、金額的にかなり

の無理が生じます。完全に治療するためには、一人500万円前後の費用がかかるとのこと。また、その後のアフターケアの問題も考えれば日本から医者を定期的に送ることの方がはるかに成果があがるとのことでした。いずれにしても、専門の医者に現地についてもらい、医療の現状をその目で確かめられ、最も効果のあがる医療援助の方法を見つけることが重要です。そのためにも医療団派遣という形で人を送り出したいと思います。ただ、最近のソ連の状況を見ると、果たして無事に訪問できるかどうかが不安の残るところです。そこで、九州各地から一人ずつ代表を派遣するという形で、大勢送り出すことは今回は見送り、医者と通訳を含め5～6人程度の訪問団ということにしたいと思います。もちろんこの機会にぜひ行ってみたいという人があれば増えてもかまいません。

また、訪問先ですが、ウクライナはすでにルートが見つかっているのも、白ロシアということで考えてみたいと思います。

現地に行くひとを募集しています

そういう訳で、現地についてみたいという人を募集しています。人選に当たってはクリアしなければならない条件等は別段設けてはいませんが、行くための費用についてはそれぞれの地域で調達することを原則としたいと思います。医者や通訳の方の費用については「支援運動・九州」の経費とします。一人当たり40万円程度を目安に考えてください。

さて、6月中旬には調査団を派遣することになったのですが、問題はいつよに行ってくれる医者が居るかということ。この点についても朗報が飛び込んできました。「同行の医師探しています。ソ連原発事故で市民ら」という1月27日付共同通信配信の記事が全国各地の地方紙に掲載されたそうで、問い合わせが殺到しました。そのいくつかを紹介いたします。

佐賀の方からです。「ソ連に医者の友人が居る。いまは年金生活の身だが医者を探しているというのであれば、通訳をかねて同行させてもよいが」かどうかというものです。また、日ソ合併企業を営んでいるという北海道の人からは、「キエフにも支店があり、社員がやはりチェルノブイリの被害にあっている。もし向こうに行くのであれば、通訳や車の手配などについては協力できるが」というものでした。そして専門の医師からの問い合わせも。

国立病院医療センター国際医療協力部に勤務している伊勢泰さんからです。国立がんセンター小児科医長や小児科学会血液腫瘍委員長などを歴任された方で、チェルノブイリ原発事故とその後遺症には大変関心をもっており、以前単独で調査を計画されたこともあったそうです。「今回の調査にはぜひ協力したい」という心強い問い合わせにグッと目の前が明るくなってきました。最大の難関もどうかクリアできそうです。あとは誰を送るか決めるだけですが、人選の締切期日は3月15日としたいと思います。各地それぞれ検討をお願いします。3月末には調査団プロジェクトをつくりその中で具

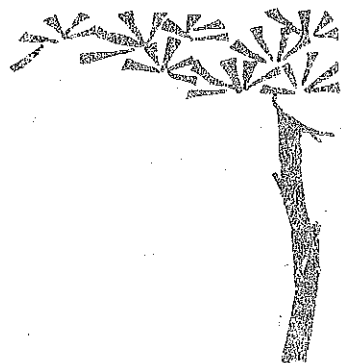
体的な作業を詰めていきます。ただ行きたいと思っている人は早めにパスポートは取っておいてください。私たち九州からの調査団を受け入れてくれる白ロシアの団体に事前に人数とパスポート番号を知らせないといけません。それをもとに「招請状」が発行されますので、早めに必要となります。お忘れなく。



6月の調査団派遣と合わせて第2次支援物資も一緒に持っていきます。今回は放射能測定器や粉ミルクなどに加えて必要最低限の医療機器、医薬品等も持っていきたいと思っています。前回送れなかったおもちゃ類など子供たちへのプレゼントもいっしょに。

そこで第二次支援募金の呼び掛です。渡航費用とは別に、300万円を目標に集めたいと思います。この金額は、今回送った物資に医薬品や簡単な医療機器を含めた金額です。

「医療調査団派遣への協力のお願い」という内容の趣意書を近いうちに作る予定です。出来次第送りますので活用してください。その他なにか事務局への要望などありましたらご連絡ください。



チェルノブイリ原発事故5周年

統一キャンペーン企画

前回の通信 (No.3) で、イーゴリ・コスティン写真展の案内を載せていましたが、全国企画として取り組まれているため、「九州は10月頃」という具合に割り振りが決まっていました。どこかの地域で2~3日持ってくるというのであれば可能ですが、九州で1ヵ月確保するというのはやはり10月でないといわりなようです。そこで時間もありませんので、この企画については各地それぞれ独自に準備を進めてください。今回は見送ることにします。

そこでチェルノブイリ5周年企画としては、前半と後半に分けての連続講演会を計画することにしました。前半の企画としては、3月8日~13日までの6日間、藤田裕幸さんの講演会です。話としては昨年8月末からのチェルノブイリ調査報告を主にしてもらおう予定です。

日程と会場は以下の通りです。

3月8日 (金) 18時~

- 会場：長崎市教育文化会館
- 連絡先：0958-47-1823 (川原)

9日 (土) 18時~

- 会場：佐世保市コミュニティーセンター研修室
- 連絡先：0956-33-1847 (佛坂)

10日 (日) 13時~

- 会場：芦屋中央公民館
- 連絡先：093-741-6520 (中山)

11日 (月) 9時~

- 会場：中津市勤労青少年ホーム
- 連絡先：0979-25-3396 (グリーンコープ)

◇ 18時30分~

- 会場：中津市勤労者福祉会館
- 連絡先：0979-32-2761 (三丸)

12日 (火) 13時~

- 会場：大分市コンパルホール
- 連絡先：0975-27-2373 (小川)

◇ 17時~

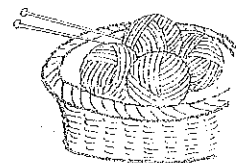
- 会場：玖珠わらべの館
- 連絡先：09737-2-6320 (秋山)

13日 (水) 19時~

- 会場：豊後高田市隣保館
- 連絡先：0978-52-2065 (中山田)

参加費はいずれも500円の予定です。

その他の地域は3月末か4月に入ってからということになります。広河隆一さんかR-DANの山根雅子さんをお願いしようと思っているのですが、広河さんが現在チェルノブイリに行っている関係で、今月末にならないとはっきりしません。決まり次第連絡しますので一応予定に入れていてください。



チェルノブイリ支援運動・九州

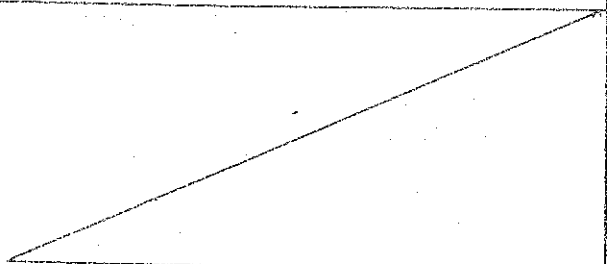
支援募金《収支報告書》

(1990年6月～1991年1月16日)

【収入の部】

摘 要	金 額
(団体カンパ) ※街頭募金も含む	(1, 474, 476)
脱原発だるまさんがころんだ	14, 032
草の根の会	39, 000
若松教会	7, 029
脱原発大分ネットワーク	135, 112
ムラサキジユクサの会	30, 454
原発いちぬけた女達の会	4, 000
脱原発ネットワークさがえもん	3, 000
原発ってなあにの会	20, 000
原発知っちよる会	9, 600
つゆくさ会	7, 000
グループイーハトーブ	10, 000
原発いらない! チューリップの会	15, 000
水俣わくわく情報センター	87, 516
原発なしでいのちきの会	202, 227
カナリー	10, 000
チェルノブイリ支援運動・福岡	90, 827
福岡県南部生協	9, 650
チェルノブイリ支援寄金・宮崎	768, 253
たんぽぽとりで	22, 776
個人カンパ (280件)	1, 172, 559
集会・講演会でのカンパ	6, 500
その他、佐賀関、うりんぼの会	
四日市北小学校2年部、中津市、いのちきの会	
日田市、地球クラブ、宇佐市立八幡小学校	
別府市、グループ of エコロジー	
伊方原発に反対する大分市民の会	
山口県立下関南高等学校	
大牟田市民生協をはじめ鹿児島や福岡など	
から沢山のおもちゃや絵本、人形、カレンダー	
などが届いています。	
合 計	2, 653, 535

【支出の部】

摘 要	金 額
放射能測定器 (5台)	1,030,000
粉ミルク代 (280缶)	392,412
粉ミルク代 スキムミルク (400缶) ネオミルク (120缶)	374,228
書籍 (絵本)	100,000
乾電池 (放射能測定器用)	2,060
通信費 (国際ファックス)	7,250
支援物資運送料 (北九州～新潟空港)	180,858
支援物資輸出通関料	6,630
雑費 (ダンボール箱、布テープ他)	4,274
	
小 計	2,145,124
次期繰越金額	508,411
合 計	2,653,535

チェルノブイリ・カレンダー

原画募集中! (福岡)

【チェルノブイリ支援運動・福岡の方で、チェルノブイリ・カレンダーを作ろうという呼び掛けが行なわれています。寄せられた原画がカレンダーとして生かされなくても、ちゃんと役に立つように計画されています。宮崎が進めている「チェルノブイリの子供たちとの絵画の交換」という運動とも合わせて、こうした取り組みはどんどんやるべきだと思っています。絵どころのある人もない人もどしどしお寄せください。以下、募集要項を掲載します。】



1986年4月26日、ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で発生した事故は、「史上最悪の原発事故」として、未曾有の被害をもたらしています。特に白ロシアやウクライナの一部の地域では、学校に通う子供たちの3人に1人が白血病などの放射能障害に苦しめられるという状況が、事故から5年経ようとしている現在も続いているのです。

私たち「チェルノブイリ支援運動・福岡」は、放射能汚染に苦しめられているソ連の白ロシア・ウクライナの人々に医薬品・医療機器・食料品などを送るために、福岡市近郊で活動している市民グループです。私たちはチェルノブイリ事故から満5年を迎える今年、「チェルノブイリの警告」を忘れないように、また販売して売り上げを支援運動に役立てるた

めに、事故が起こった月である4月から始まるカレンダーをつくることにしました。

私たちはカレンダーを作るにあたって、この支援運動の輪を広げるために、できるだけ多くの人々からその原画を募りたいと思います。みなさんがチェルノブイリの惨状に関心を向けてくださいますように、またその思いを絵に託して寄せていただきますように、呼び掛けます。

●募集要項

【作品規定】

B4の用紙に収まれば、どんな技法で書かれても結構です。

【テーマ】

チェルノブイリ原発事故の悲惨な状況を乗り越える、勇気や希望を奮い起してくれるような作品。例えば事故以前の現地の「豊かな自然」をイメージしたものなど。

【応募〆切り】

2月末日（郵送の場合は、できるだけ末日までに着くように）

【送り先】

福岡市南区長住1-2-37

チェルノブイリ支援運動・福岡

田宮 けいこ

【その他】

採用された作品の著作権などは支援運動・福岡に帰属することになります。また、応募された作品は全部支援物資と一緒に現地の子供たちに送りますので返却できません。ご了承ください。尚、作品の裏には住所・氏名・年令を明記のこと、お願いします。

ウクライナを訪問して

この原稿は昨年10月、東京で開かれたチェルノブイリ報告会での発言を起したものです。11月に発行するはずだった通信に掲載する予定だったのですが、11月は通信が出ませんでしたので今回の掲載となりました。

I 現地へ行くまでに

たまたま時を同じくして藤田さんのチームとは1時間くらいの差で1便だけ遅れて飛行機に乗り、現地を訪れたわけです。「チェルノブイリ救援中部」が出かけましたところは、ウクライナ共和国です。汚染の最もひどいチェルノブイリの北側の白ロシアには一切行っておりません。ウクライナ共和国にチェルノブイリ原発があり、そのキエフ州内にあります。私たちが拠点を置いたところは、キエフ州の西のジトミール州にあるホテルで、そこを拠点としていろんなところを回りました。

ジトミールという町は、チェルノブイリの南西約150キロ位離れたところにあります。このジトミール市内には、3分ごとに放射能濃度が表示されるような電光掲示板が高いビルの上に据えてありました。

帰国して、スライドを多数使った2時間くらいの報告会を各地で行ってきました。本日は15分ないし20分の時間しかないので、ほとんどサワリの話しかできな

いと思います。

「チェルノブイリ救援・中部」というのは、独立した一つの団体で、各救援団体に対する情報提供機関でして、各々の団体の上部機関ではありません。今回のウクライナ訪問に際しては、中部電力管内の各救援団体の資金的・物質的援助を受け、さらに東京、九州、四国とかいろんなところからの援助をいただきました。財政的問題については別紙資料をご覧ください。

「救援・中部」は今年4月に結成されたわけです。私の属する浜松の救援組織はその前からあったのですが、情報がリアルに感じられてきたのが3月くらいでした。人的被害について前々から関心を持ちながらも、やっと3月になってはじめて知るようになったのです。すぐに救援しなきゃと考えたけれど、どこに何をどうやって送ればいいのかわからない。日本にいて、かの地のどの団体にどうやって送るかについての情報はなかなか出てこないし、具体的進展がないわけです。ということで、ウクライナから日本に来られている女の方の手をわずらわせまして、「救援・中部」では、ウクライナ、あるいは白ロシアに手紙を送りました。手紙には、「被害の状況を教えて欲しい」「必要なものがあれば連絡して欲しい」「私たちを受け入れてもらえるか」といった何点かにわたって書きました。その結果、8月のぎりぎりになって届いたのが、ウクライナのジトミール市にある週刊新聞の編集局からの招待状でした。その編集局がいいか悪いかという選択の余地もなく、そこに飛びついて出かけたというのが実情でした。白ロシアに行くつ

もりがなかったというのではなく、経緯からそこに行かざるを得なかった。その後、私たちの手紙がソ連のいろんな新聞とかで紹介されることによって、現在25通の招待状が「救援・中部」に来ています。それらをすべて私たちがさばくわけにはいきません。だから、その招待の手紙は、全部訳した上でファイルしてお分けしております。

どこの団体にやれば確実かとよく聞かれるんですけども、それはそれぞれの団体が独自に自分の足、自分の目で、信頼のおける団体と連携をとりながら、やっていただきたいと思います。私たちのウクライナ訪問の目的は、間違いなく、困っている人に確実に物が届く道を探してくるということにあったのです。

Ⅱ ウクライナでは

まず、荷物について言いますと、ファクシミリ2台、放射能測定器2台、医薬品、食品等を持って行きました。現金もです。放射能測定器は、個人のもの1台も結局あげてくるという結果になりました。

ウクライナを訪問しまして、たいへん難しい問題に出会いました。被害の深刻さが新聞で報道されていますが、私たちが回った所でも表面に出ている被害がもちろんなかったわけではありません。たとえばジトミール市内の子ども病院には白血病の子どもが再入院していたり、ある母親は1人目の子どもを脳腫瘍で亡くし、2人目も白血病で入院していて、日本は被曝の経験があり医療水準も高いから、ぜひ子どもを連れて行って治療

して欲しいと泣きついてきました。それじゃあ連れて行きましょうというわけにもいかず、この実情を日本に伝えておきますと答えたわけです。また、ジトミール市郊外には森の中にサナトリウムがございまして、汚染地から親元を離れて3週間子どもたちだけで生活しており、3週間たつとまた汚染地に戻るということをしておりました。退去しなければならない村の中に残された老人もいました。そこは日本の許容線量の約18倍という大変高い放射線被曝を毎日受けるような所なのですが、「自分たちはこの土地で畑を耕しながら、大地とともに生活してきた。だから移住するよりも、ここで死ぬんだ」と97歳のおばあさんが話すのを聞きました。しかし一方で、18歳から20歳くらいの青年たちにインタビューしたところでは、そんなお年寄りを残しておけないから子どもたちも移住しないということもあるようです。それから、マーリンという、チェルノブイリの南西80kmくらいにある市において、3歳の子を持つ母親が「私はこの子に生まれてからミルクや母乳をやらなかった。スープとボルシチをあげてきた」と言っていました。直接放射線の被害を受けずとも、被害の怖さゆえに、ミルクもやれずに、子どもの成長を阻害してしまうという状況なわけです。視力が60%も低下した子どもの例がいくつもありました。しかし、そうした場面ばかりではないのです。それは、現地でどういう人に会うかによって、おそらく変わってくるのだと思います。

私たちは28ケース、500kgに及ぶ荷物を持って行ったわけですが、キエフ

の病院に行って尋ねますと「自分の病院では医薬品などは足りている。ただ大型の診断装置はない。精神的な共感、連帯をしてもらえば充分だ」と院長から聞かされました。ところがその一方で、その病院の若い主任が、2週間以内に不足してしまう薬品のリストを、私たちが帰りがけの車の中に持ち込んでくるのです。

ソ連邦では全般に、医療に対する不信感が市民の間に存在するように感じられました。私が会ったいろんな医者たちの姿を見ても、彼らが放射線障害についてどれだけ深刻にとらえているのか疑問を持ちました。というのは、「自分たちは一生懸命検査し、治療したいのに、薬がなくてできない」というような困った様子があまり見受けられないんです。

子どもの将来にかかわることなので、医者はもう少し自己犠牲をして、治療に専念してくれればなあと思ったところです。

だから、物や装置を送るにしても、今のソ連の体制のまま、それらが有効に生かされるかという、私はちょっと悲観的なんです。物を送ると同時に人を送る。日本から医者、そして物を送る必要があるんじゃないかと思っています。

データについてですが、向こうからのデータの少なさは、ある意味で当然という気がします。血液検査をやっている病理学病院をジトミールで訪れました時、古い錆びた顕微鏡で一つ一つ見ながらノートにメモしている風景を見ました。市場では、食品の放射能測定値を、これまたノートにメモするんです。それらを集積していくのは、大変な作業になるわけです。コピーも、コンピューターも少ないという物質的状况があつて、データが作

りにくい。これに加えて、医者を信用できない、入院しても何も治療してもらえない、手続きが面倒くさいという体制の問題があつて、データにそもそも上がってこない環境、被害状況が相当あるんじゃないかと思っています。

Ⅲ 外務省の協力

最後に、私たちの渡航に対しては、外務省に非常にお世話になりました。当初、ソ連に着いてからの荷物の保管・運搬について不安でした。それで外務省と事前に相談をし、結果的には、向こうで日本大使館の人が、荷物運搬のためのワゴンカーも同道して迎えに来てくれ、荷物は一晚、大使館の庭に留めてくれて、さらに翌日キエフへいくための飛行場まで運んでくれたのでした。荷物の重量は超過料金以上の重さで、ほとんど持ち込めないんですけども、それについても、外務省が日本のソ連大使館にはかってくれて、ソ連大使館が保証書を発行してくれました。その保証書があつたおかげで、アエロフロートでの荷物運搬料も、無料で済みました。モスクワからキエフまでの運送料についても、日本大使館が向こうの当局に話をしてくれて、無料になりました。

近日中に別の名古屋のグループが行かれますが、この方たちの荷物も無料で送れることになったと聞いていますので、この方法は成果として利用されたいかがかと思えます。

渡辺 春夫

(チェルノブイリ救援・中部)

温かいクリスマスを

チエルノブイリの

子供にプレゼント

支援グループ

原発事故で被害に遭った子供、クリスマスプレゼントを。市民グループ「チエルノブイリ支援運動・九州」(深江守事務局長、事務局・小倉南区徳吉東一丁目)が、放射能測定器や粉ミルクをはじめ、九州各地の子供たちから寄せられたぬいぐるみ、クリスマスカードなどを被災地のソ連ウクライナ共和国ソトミール州あてにこのほど発送した。二十五、六日ごろには現地に届く予定で、深江さんは弾んだ声で「プレゼントを手にした子供たちの笑顔が目に見え

る」。
「チエルノブイリ支援運動・九州」は今年六月末に発足した。会員は現在、下関から鹿児島まで九州各地に約三百人。発足後間もなく、会報で募金を呼び掛けた。このほか、街頭募金に立ったり、各地の反原発グループにも協力を呼び掛けたところ、支援金のほか支援物資もぞくぞく届き始めた。

原発事故の子供助けよう

ソ連へ粉ミルクや絵本

市民団体「チエルノブイリ支援運動・九州」(事務局・北九州市)はこのほど、粉ミルクなどの援助物資約八百キログラムをソ連に向けて送ったのは粉ミルク四百キログラム、放射能測定器五十台、絵本約二百冊、日本の子供たちから寄せられたおもちゃや人形、折り紙、クッキー、リスマスカードなども添えた。

九州の市民団体

中部地方で同様の活動をしている「チエルノブイリ支援・中部」(事務局、名古屋)は、九州と連携して今後の援助に必要と、この判断から

と協力をお呼び掛けている。事務局の副局長深江守さん(53)は「市民運動としてできる節節の医療面の援助は何か、と考えた。また訪ソ時に急遽を契機に診たいという医師がいれば、できるだけの協力をしたい」と話している。

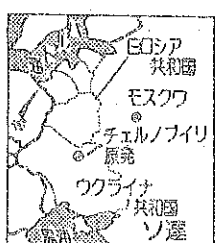
医師が佳果

と協力を呼び掛けている。事務局の副局長深江守さん(53)は「市民運動としてできる節節の医療面の援助は何か、と考えた。また訪ソ時に急遽を契機に診たいという医師がいれば、できるだけの協力をしたい」と話している。

チエ事故調査、支援

北九州の市民団体計画

医師をそれぞれ同行、必要なら医療機関、医師品、ソ連に届ける粉ミルクや放射能測定器の専門医が少ないという



「支援運動・九州」は今年十二月、被災地の子供たちを訪問し、その際、白血病など珍しい血液疾患の専門

会の連絡先は北九州市小倉南区徳吉東一丁目三ノ二四、深江さん方。電話093(452)0665。

乳は日本の市民運動として初めての実績になりそう。計画によると、調査団は今年五月ごろ、一〜二週間の日程で千人規模が二班に分かれて、ウクライナ共和国と白ロシア共和国の病院を訪問。その際、白血病など珍しい血液疾患の専門